

## 2年間の学びと実践を終えて —今後の展望と課題—

濱口 晃枝

(生徒指導力高度化コース第5期生)

### はじめに

私は本研究科に入学するにあたって修学課題として3つのことを挙げていた。①どんな些細なことも見過ごすことのない観察力と多様な教育課題に対応し、それを解決できる力量を身につけること。②さまざまな学校現場で実務経験を積み、実践的指導力を高めること。③授業やフィールドワークを通して、子ども一人ひとりと全力で向きあい、日々のコミュニケーションを大切にした優れた教師になること。2年間の大学院での学び、そして実践を通して、修学課題に取り組んだ。まだ課題は残るが、来年度からの教師生活に生かすことができると感じる。

### 1. 2年間を振り返って

生徒指導力高度化コースでは、次の3つのことが重視されていた。

#### ①現職教員が現在抱えている課題を中心とした事例研究

事前にさまざまな事例に触れておくことで、冷静に自分がその立場に立ったことを想定することができる。それは実際の現場において、落ち着いて判断する場合や教壇に立つ際に自分なりの考えを増やすことに大いに繋がった。

#### ②学生同士で行うディベート

ディベートでは勝ち負けにこだわってしまいがちになってしまうこともあった。しかし互いに論を立て、言い負かすのではなく、相手を納得させるための話し方や集団としての意見のまとまりを作っていく上での苦労と価値を身につけることができたように思う。それは教職現場において、教職員と連携していく際にも役立つのではないかと考える。

#### ③フィールドワークと専門知識の習得

子どもたちを取り巻く様々な問題の解決に向けた支援のために、臨床心理学の視点やカウンセリングの技法等を取り入れた授業が行われていた。そこでは、専門的な知識を研究者教員から学び、それを実務家教員からの今日の教育に当てはめた提示により、理想と現実を共に見つめながら、現場での専門知識の生かし方を考えることができた。

教職専門実習においては、授業で学んだ理論を現場での実践に生かそうとした。しかし、実際の現場では理論通りにいかないことがほとんどである。大きな壁にぶつかることとなったが、実践から新たな課題も見出し、教師になりたいという志が一層大きくなった。

## 2. 教職専門実習での成果と課題

京都市内の小学校で2ヵ月間、6年生1組を中心に実習を行い、その担当の先生から様々な指導を受ける中で教師としての仕事の重さを改めて感じた。教師に“とりあえず”という言葉はなく、生半可な気持ちではできないこと、“泥臭く”取り組むことが大切であると実感し、これからの教師生活に大いに生かすことのできる機会となった。

教職専門実習での成果と課題として、ここでは主に3つ挙げる。

### ①“メリハリ”のある指導ができるようになること

実習での課題として“メリハリ”のある指導ができるようになること」を挙げていた。それは、毎日子どもたちを見ている中で、担当教諭の指導から子どもたちが変わってきたことが挙げられる。子どもたちは、時間や場所に応じて相応しい行動を弁え、互いに声掛けしながら取り組んでいた。それは担当教諭がメリハリをつけた指導をしているからではないかと考え、教師として“メリハリ”のある指導の大切さに改めて気付かされた。

### ②教職員間の連携

学校現場に入らせていただく中で、教職員間の連携が密に取られているように感じた。それはつねに学校長が教職員の方々に「教師一人だけで頑張るのではなく、学年で、また隣の学年や学校全体で協力し、課題を解決していこう」と呼び掛けておられることが挙げられる。そこから教職員間の連携は必要不可欠なことだと改めて実感し、私も京都市の小学校において教職員の一員として協働で、子どもたちを育てていきたいと思うことができた。

### ③学級経営の在り方

担当教諭は、始業式に、「こんな学級にしたい」というメッセージを子どもたちへ伝え、学級目標を考える時間を与えていた。それは、児童一人ひとりが学級に対する想いを持ち、これを学級全体で共有した上で学級目標を決め、目標に向かって取り組もうとする意識を持たせることを意図していたと考える。そのため、学級目標は、“自分たちが実行できる具体的な学級目標”を作るように促していた。また、学級目標だけでなく、つねに“具体的”に子どもたちに伝え、いつも具体的に子どもたちが考えられるように心掛けておられた。

## 3. 修了論文について

教職専門実習での成果と課題を踏まえ、修了論文において、「いじめを克服するための学級作り—学級経営に焦点をあてて—」研究した。それは私が小学生だった頃の経験から、「いじめをなくし、子どもたちが楽しく安心して過ごせる学級づくり」を心掛けた教師になりたいという思いからである。いじめは、人間関係が複雑な学校でとくに起きやすい事象であり、いじめをなくすことは難しいとされている。しかし、いじめの背景を理解し、担任として「いじめを克服するための学級づくり」を行っていくことで、子ども同士、学級全体へ働きかけ、いじめを克服することは可能であると考え、この課題を設定し、研究した。

## おわりに

私は教師として学級づくりの目標を明確にした上で、子どもたちが学級や教師に向ける思いも受け止め、子どもたちと共に私だからこそできる学級づくりを目指していきたい。私が担当する子どもたちのニーズに合わせ、その時々の子どもたちが求めているものを受け止め、共に考えながら、教師として教壇に立つ際に役立ていく。今はまだ多くの課題ばかりが残る私であるが、教師生活を通して、子どもたちやお世話になった教職員の方々に恩返しをしたい。そしていつまでも子どもたちや保護者の方、学校全体を“笑顔”にできる存在であり続けたい。